
ギブソウル（仮）

AKUE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギブソウル（仮）

【Nコード】

N2997T

【作者名】

AKUE

【あらすじ】

人気ゲームSVET専用VRMMORPGライストーン。

宮田 涼平は仮想現実の世界でエイトとしてある目的へ向けて突き進む。

それがある野望の引き金となるとは思わずに……。

涼平は迫りくる現実には打ち勝つ事ができるのか！

そして、無謀という名の挑戦に踏み出した若葉印の作者は、自ら招いた現実を終わらせる事ができるのか！！

いわゆるVRMMORPG↓異世界物ですが、異世界に行くのは中盤以降になります。ある程度プロットを考えてから書き始めてますが、すでにキャラが自分勝手に動いて初期プロットから外れています。完結向けて、週1のカメ更新で頑張ります。

V R M O R P G (前書き)

文字数短めですが、プロローグになります。

V R M M O R P G

「ザッザッザッザッ・・・」

一人の青年が木々が生い茂る幅5m程の道を走っている・・・というには驚きの速さだったが、それは一先ず置いておこう。

青年の前には、木々の間から差込む木漏れ日が揺れ動き、清々しいまでの風景が広がっている。

しかし此处に訪れた人の多くは、嫌悪感や違和感を覚えるだろう。

まず、木々が揺れるのに風が感じられず、木々の中を歩いているのに深い緑の匂いが感じられず、森林の中にいるのにひんやりとした感触もない。

視覚・足音以外何も感じられない・・・まさしく深い森の映像をバツクに走っているような感じを受けるだろう。

そう、これはライストーン・オンラインというV R M M O R P Gの仮想現実の世界であり、すべて脳内で再生されているデータで作られた世界である。

その中、俺は預けたアイテムを受取るため分身であるキャラバタ―【エイト】となって、このデータの世界を1時間ほどひたすら走っている。

目的地は始まりの町の一つマイラット皇国の首都マイラット城下町である。

「はぁ、いくら広大なMAPが魅力とはいえ、町への移動距離が50Kmもあるのはどうかと思うよ。本当に・・・」

スキル「加速」を使用して時速40キロぐらいで走っていたから残り10Km程度つてところだから、このまま行けば後20分もあれば着くはずだけど……。

いくら本当の体が疲れる事はないとしても、精神的にはかなり疲労がたまる。

まさしく、風景があまり変わらない高速道路の長距離運転をしているみたいな感じだ。

「そもそも転生の聖地ピレネー神殿で待つてくればこんな苦労もなくて良いのに、町に移動したから取りに来いとは……わが妹ながら酷すぎる。」

「それに費用として転職前の全財産900Mギルを払ってるのに……、優しさが足りないと思うのだよ！って愚痴を言っても解決しないか。」

俺にはアイテムを他の人に預けられない理由があり、妹なら我儘させ聞けばこの世界で一番信用がおけるので預けたのだが、我儘のレベルが想定を超えていた。

しかたない、とにかく移動だ！移動！！

ライストーン・オンライン（前書き）

お久しぶりです。 A K U Eです。
読んでくれた方々、お気に入り登録してくれた方々、本当にありがとうございます。御座います。

いきなりですが、5月末から10日ほど海外出張行く事になりました。

でも来週分を早めに投稿して、再来週分を予約投稿していきます！

あと、今回の投稿は3回の書き直しをした結果、文字数が少なめになりました。ごめんなさい。

では、楽しんで頂けると嬉しいです。

ライストーン・オンライン

バーチャルリアリティ・仮想現実……

20世紀後半では夢の技術と言われたが、2000年近く経った2191年では誰でもが恩恵を受けられる技術となっていた。

それはSVETというサーケット型のVRPC（バーチャルリアリティ対応コンピュータ）のおかげだ。

SVET——体性感覚型仮想現実環境技術（Somesthetic type Virtual reality Environment Technology）——は、2176年にブレイン・エレメント社から発表された仮想現実技術で、180年近く研究されてきた夢の技術を一気に実用領域まで押上げた技術だ。

SVETの特徴は、脳へのアクセスを電気信号ではなく【素粒子インターフェース】という新しい概念を使用した事だ。その結果、従来の研究・試作品では必須事項だった外科手術を必要とせず、脳が持つ全情報へのアクセスとその膨大な情報を処理する高性能を発揮した。

ただし【素粒子インターフェース】に関する技術はブラックボックス化されたため、ハードウェアの市場はブレイン・エレメント社の独占状態となった。その代わりに、自由に開発が行えるソフトウェアの開発競争が激化し多くのソフト・サービスが発売されていた。

その中、2182年に元ブレイン・エレメント社の技術者が起業したファーマス社から、初の完全五感を実現したVRMMORG

としてライストーン・オンラインが発表された。

ライストーン・オンラインは2183年からクローズβを2年、オープンβを1年行い2186年に一般サービスを開始した。しかし、開発段階で精巧すぎる五感情報が肉体に影響を及ぼす事が判明し、一般サービス時には味覚、嗅覚、痛覚や体感温度などがカットされる事となった。

売りだった五感情報をカットした代わりに、ファーマス社はそれ以外の要素でリアリティを追及した。

有名なところはキャラバター、NPC、モンスターなどの表情、AI、モーションパターンの造りこみをした事で、その造りこみ具合があまりにも精巧すぎてNPCに恋をする者が出るほどだった。

そして、その追求がMAPの移動まで及んでしまったのは、ほんの些細な不幸事なのだろう……

走り続けていた俺は、30分ほど前に小川を見つけたので休憩をかねてほとりを歩いている。

マイラット城下町までは残り5Kmつてところだ。

「はあ」

さすがに歩くのも飽きてきた俺は偽物の空を見上げて盛大に溜息をついた。

その時、突如「ピン！」と頭の中に電子音が響いた。

ライストーン・オンライン（後書き）

次回に続く。

戦闘直前（前書き）

お久しぶりです。 AKUEです。

何とか投稿できました。

余りにも仕事が忙しく、さらなら問題（後書きに書いてます）で筆記作業が辛くなってきた。

そのため今回は殴り書き状態です。

さらに文字数少ないですが、読んでいただけると嬉しいです。

戦闘直前

俺は頭に響いた「気配探知」による警告音で、一気に気を引き締めた。

パシブスキル「気配探知」は敵性指定——モンスターやホワイトリスト登録されていないプレイヤー——が警戒範囲に入ったとき警告音を鳴らすスキルだ。スキルレベルの最大で6、レベル上昇とともに警戒範囲と警戒対象を向上が可能だ。

俺は現在レベル5で半径750mまでは全ての、750mから1Kmまでは自分のレベル+10までの敵性を知らせてくれる。

俺はすかさず頭の中でMAP表示かと念じて、目の前に半透明なMAPが表示させた。

表示されたMAPには自分を中心にした半径1.5Kmの詳細な地図と、自分の後ろから接近する赤い点が3つ表示されている。

赤い点はアンノン指定の証で、フィールドMAP上では多くの場合、敵である。

俺は直ぐに自分の状況確認を行う。

レベルは10で、装備は布の服とズボン、革の靴、ショートソーダの完全装備だ。何しろこれから装備一式を受取に行く訳だし、これは仕方ない。

そして今いる場所は、右側に幅3mぐらいの小川があり小川は木々に囲まれている。

ここでの戦闘は敵の隠れ場所が多いためかなり不利だ。だからといってトレインしたまま町に行くのもまずい。

俺は表示したMAPで戦闘のしやすい場所を探して、1Kmぐらい先に道と道の合流点で少し開けた空間を見つけた。ここなら迎え撃つ事が可能で、運よく他のプレイヤーもいないため自由に戦闘ができる。

即決するとMAPを見ながらさきほど見つけた目的地へ向けて走り始めながら、今一番の懸案事項への対処を開始する。俺は頭の中で>フレンドリストくを呼び出し、妹のリッ力を探して通話を選択した。

相手も待ち構えてたらしく、妹は直ぐに通話に出た。

《あ、今どこよ?》

《敵とエンカウントした、だからさらに遅れる。じゃ》

《じゃって、ちょっと、まあ……》

妹が何か言っていたが全て無視し要件だけ伝えて通話を切った。MAP上で確認していた敵の移動速度が予測より早く目的地に着く前に追い付かれる可能性が出てきた為だ。

俺は戦闘に集中するためこの後の問題を全て頭から追い出し、腰に下げた剣を抜きながら追い付かれないように走る速度を上げた。そして、1分ほど走った所で目的地に出た俺は迎え撃つべく敵が出てくる方向へ向いた。

戦闘直前（後書き）

かなり短めでしたね。

連載前に7話程度書き溜めてあったんだが、連載後に80%も書き直しになってしまった。

でもストーリーはそのまま！

おかげで7話に登場予定だった妹が次回登場です。

では、次回にまた。

出張の準備しないと……

待ち人は来ず（前書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

主人公エイトの妹が登場です。

今回は長めですが、特に話の進展はありません。

待ち人は来ず

私、宮田 澪^{れい}は、ライストーン・オンライン（RIO）のアバター【リツカ】となってマイラット城下町の北側城門前にいる。

今日は兄、宮田 涼平^{りょうへい}のアバター【エイト】が転生するとかで、アイテムを一時預かる依頼を受けているんだけど。

《あ、今どこよ？》

《敵とエンカウントしたから》

あー、また遭遇したのね。

《だから、さらに遅れる。じゃ》

《じゃって、ちょっと、まあ……》

って感じで、一方的に着信をかけてきて要件だけで切られた。

「ふうー。 ミウ、ごめん。 なんか兄はこれから戦闘だって。だからさらに遅れるって。」

私は横にいるミウに誤りながら簡潔に状況を説明した。

ミウとの出会いは1週間ほど前で、ミウが男共に囲まれていたのを、一緒にいた兄をけしかけて助けたのが切っ掛けだった。その後オロオロしているミウに声かけて、しばらく一緒にいることにした。

実はこのゲーム内の性別はリアルと同じになるから、どうしても女性性が1人でいると寄ってくる男が多いのでボディガード代わりだ。

あつー一応私も女性だからね？

その後、いろいろ話していたら同じクラスの平野^{ひらの} 心優^{みう}ちゃんだと分かって友達になったんだよね。

「うん、平気だけどお兄さん大丈夫なの？ 移動しないでピレネー神殿にいればよかったかな？」

「ん？ でも、ミウもレベル上げたいでしょ？」

さきほどまでミウのレベル上げの手伝いをしていてこの1時間程でレベルを6上げてちょうどレベル30になった。

「上げたいけど、お兄さん急ぐため高レベルのフィールドを通って移動してるんだよね？ それに転生直後はレベル1になって装備もなくなるとか言ってたかった？」

そう、このRioはレベル500になると転生が可能で、転生後はレベルが1になり全財産没収——全てのお金とアイテム——となる。そのかわり、今までのスキルレベルは維持され、基本ステータスに転生補正が付く。

ちなみに知合いに財産を預かって貰う事で全財産没収は回避できる。今回、兄の依頼もこれで、私は武器・アイテム以外の全財産を貰う事で引き受けた。

別に鬼畜ではないよ？ ミウの装備を整える為に使うんだよ。

「兄ならレベル100の敵でも初期装備で倒せるよ？」

「なんで疑問形なのよ？」

「うふふ、本当に大丈夫だよ。こないだ戦闘システムについて説明したの覚えてる？」

「えっと、初心者やアクションが苦手な人向けのモードと玄人向けのモード……だっけ？」

「そう、初心者向けがアクトサポートモードASM、玄人向けがエキスパートモードEMだね。これの違いは分かる？」

「初心者向けは敵を見て攻撃するれば自動でやってくれて、もう一つのは全部自分でやるかな。」

RIOの戦闘システムは2種類あり戦闘のしかたが大きく異なる。

初心者向けのアクトサポートモードASMは、攻撃対象に目を向けて剣を振れば敵との間合いや状態から可能なモーションで自動攻撃を行い、敵からの攻撃は防御判定に成功すれば自動防御を行う。

剣武技や魔術などのスキルは、攻撃対象に目を向けるか技名を言うか視界上または意識上のアイコンをクリックする事で発動され、間合いや誘導も自動で行われる。

玄人向けのエキスパートモードEMは、自分のアバターを使い全ての動きを自分の自由意志で行って戦闘を行うモードだ。

それは剣の握り、振り上げ、間合いの調整、回避行動や防御時の盾の角度などまで及び、スキルは呪文詠唱やモーションアクション、攻撃対象・箇所の選択、間合いの取り方まで自分でやる必要がある。その為、剣の握りが悪ければ剣がすっぽ抜けるし、呪文やモーションアクションに間違いがあればスキルが発動しないなどリスクが多い。

その分、スキルキャンセル、途中変更、連続発動、複数の組み合わせ

が可能であり、使いこなせば多彩なアクションでアニメや映画のような戦闘も可能になる。

ちなみに、年に数回のトーナメント式武道会が開かれ、ゲームをしていない人ですらネット中継で観戦するほど人気がある。

「うん、大まかにいうとそうなるね。それ以外にも大きな違いがあるんだけどわかる？」

ミウは顔を横に振り分らないと意志表示をする。

「実はここが重要でASMはステータス依存でEMは技術依存なんだよね。ASMのステータス依存はステータスやレベルが敵より強ければ楽勝だし、敵と同等だと苦戦する。敵の方が強ければほぼ確実に負ける。」

私は確認のためミウの目を見ると、ミウは頭を縦に振って頷いた。

「で、EMの技術依存はダメージ判定などの一部の数値計算から解放されるんだよね。だから、攻撃力が弱くても敵の急所を突けば倒せるし、回避力が弱くても敵の攻撃を予測して動けば攻撃の回避ができる。あつ基本ステータスは生きているからAGIの優劣で動きの速度が変わるし、LUKの優劣でドロップ率が変わるとかはあるよ。」

普通、急所とはいえ攻撃力が低ければダメージを与える事は出来ないと考えがちだが、RIOの場合は一撃で倒せる可能性がある。

その理由は、RIOのモンスターは内臓や心臓などの内外の組織情報を細かく持ち、弱点や急所などが細かく設定されている為だ。

だから、関節などの弱点へのピンポイント攻撃はダメージが3倍以上になり、心臓などの急所へのピンポイント攻撃は即死判定が機能

する。

「うーん。それだとE Mの方が強すぎないかな？」

「それが、そうでもないのよ。要はこのアバターの体を使いこなせなければ、ステータスの弱い敵にすら負けるんだよね。なにしろ本当の自分の体ではなく、高性能なゲーム内のアバターででしょ。私は現実では1mもジャンプできないけど、このアバターなら可能なんだよね。そういった違いがあり誰でも簡単に使いこなせる訳ではないのよ。」

「そつ、そつなのかな？」

「そうなんだよ。で、兄はこのE Mを使いこなしているしステータスに転生補正が付いてるからレベル差200ぐらいなら余裕だと思うよ。」

転生補正は、転生1回毎に全ステータスに+15の補正が付く。兄は今回7回目の転生で+105の補正が付いてるから、装備が初期装備でもレベル300程度の敵なら倒せる。

「それにミウにE Mを教える為、兄に合わせたいしね。」

今日の最大の目的は、兄にE Mの戦い方をミウに教えるよう頼む事にある。

「別にお兄さんでなくてもリツカが教えてくれれば良いんだよ？それにリツカは武道会で47位なんでしょ？」

「まあーね、でも日本国内で47位だから大した事ではないよ。そ

れに私の師匠は兄だしね。 私より強いよ。」

兄は一度世界ランク6位の人と戦った事があるらしい。 結果は最後に負けたとか言ってたけど最低でも6位と戦える力を持つてるんだとは思う。

「まあとにかく南側の新しいカフェができたらしいから、そこで茶でもしようよ。」

半年前にアイテム以外の味覚が解禁されたおかげで、今は飲食店の開店が相次いでる。
特にマイラット城下町の南側はカフェやケーキ屋さんなど女性に人気のお店が多い。

「いいけど、南側だとまたお兄さん遠くならないかな？」

「ハイキハイキ、なんならカフェ代も兄持ちにしようか？」

「もう！ お兄さんが……」

ミウはブツブツと兄の心配事を言っているが、結局付いて来るらしい。

私たちはマイラット城下町へ入って行った。

待ち人は来ず（後書き）

次回は戦闘場面になると思います。

戦闘突入（前書き）

いつもありがとうございます。

やっと初戦闘シーンです。
では、お楽しみください。

戦闘突入

俺は追って来る敵との戦闘のため広場の奥まで走り敵に向合うため振り向いた。

それと同時に前方から「カサカサ」という音と共にイルウルフが3体現れた。

イルウルフは目が3つあり1.5m程ある体格が特徴のこのMAPでは雑魚扱いされているLv53の狼型モンスターで、属性は土で主攻撃方法が爪や牙などの物理攻撃、3から5体の群れで現れる事が多い。急所は額にある目と首と胸部中央の心臓、弱点は目、関節にある。

それに対して俺はレベル10だが、戦闘システムをEMエキスパートモードにしているうえ転生による補正もあるので倒すのは可能だ。

スキルはサポート系身体強化の全スキルと思考加速を起動してある。これによりステータスを最大2倍まで底上げされており、思考は通常の3倍程度まで加速されている。

本当は魔術系の身体強化の方が性能が良く一時的に最大で4倍まで底上げできるため多くの人はそちらを使うが、俺は常に使用でき魔力を消費しないサポート系を中心に使用している。

ちなみに魔術系とサポート系の身体強化の同時使用は、ライストーン・オンライン R i O のスキル仕様のため使用が難しくできる人はほばいない。

俺は加速された意識で現れたイルウルフの状況を確認する。

イルウルフ3体は左側7mと正面4m、右側5mの距離からこちらへ向かって突っ込んできている。

俺は1対多の戦闘時のセオリー通りに1対1の戦闘を心がけた戦術

を取る事にする。

まず一番距離のある左端のイルウルフに向けてナイフを少し間隔をあけて2本投擲した後、正面と右側のイルウルフが直線上に並ぶよう左へ移動をする。

左側のイルウルフは投擲されたナイフを回避するため減速し右側へ回避行動を始めた。

それに対し正面の敵は俺の動きに合わせ方向を変えながら3m程ジャンプし飛び掛ってきたので、俺はすかさず飛び上がったイルウルフの下に走り込みながら首の付根へ剣を突き立てそのまま剣を引抜くよう動かし通り抜ける。

急所である首と心臓へのダメージにより即死又は致命傷を負ったと思われるイルウルフは「ドサッ」という音と共に地面に落ちた。

まだ生きている可能性はあるが最低でも致命傷は与えたためしばらくは動かないと判断した俺は、残り2体のイルウルフに意識を向ける。

残りのイルウルフは先ほどナイフを交わしたのが左側3mのところに、もう1体は正面1.5mから速度を増してこちらへ突撃攻撃に入っている。

俺は剣に闘気を纏わりつかせながら、残り2体が再度直線上に並ぶよう突撃攻撃をかけてきたイルウルフをギリギリの所で右側に回り込み回避行動をとる。

そして、目の前を通り過ぎるイルウルフの首に左上から右下に向けて闘気を纏わせたショートソードを振り下げた。

ショートソードは振り下げた速度とイルウルフの移動速度により首の半ばまで食い込みイルウルフの前足が崩れ動きを止めた。

それと同時に残り1体が目前で止まったイルウルフを避けるかたちで4mほどジャンプしたのを視界に捕らえる。

俺はショートソードが刺さっているイルウルフに足をかけ一気に抜くと、上を跳び越えるイルウルフの右後ろ足の付け根目掛けて、ショートソードに纏わせた闘気を刃として打ち出す中距離用基本スキル「刃波」^{はなみ}を打ち出す。

打ち出した刃波は狙い通りの場所にヒットし右後ろ足を付け根から先を切り取った。

切取られた足は霧状になり喪失した。これは部位破損した事による現象だ。

刃波により足を切取られたイルウルフは攻撃と部位破損の反動で体制を崩し背中から地面へ落ちた。

「ラストオー―！」

俺は体制を立直そうともがくイルウルフの額の目に向けてショートソードを突きさし止めを刺す。

イルウルフは一瞬体を痙攣し崩れた瞬間、ショートソードが「パリーン」という音と共に砕け散った。

「ふう、さすがに壊れたか……」

使用する武器は全て耐久度が設定されており、耐久度が0になるとその武器は崩壊し修理できなくなる。

そう簡単に破壊することはないが、最弱のショートソードでLv50以上の敵と戦ったため武器の耐久度を使い果たしてしまったようだ。

俺はイルウルフが全て死亡したのを確認すると、倒したイルウルフに触れ頭の中で「ゲイン」と呟いた。

そうすると触れていたイルウルフが霧状になって消えた。

R i Oでは敵を倒しただけで経験値やアイテムが取得できなく、取得には倒した敵に触れ頭の中又は口で「ゲイン」と言う必要がある。

3体目のイルウルフを霧に変えたところで、ログを表示させ先ほど壊れたショートソードの代わりとなる武器が取得できたかどうかを確認していく。

取得した内容はリアルタイムで視覚上に表示させる事もできるが、この方法だとイザって時に邪魔になるので俺は後でログで確認するようにしている。

ログを見ている時には狼の肉やイルウルフの目など食糧、素材系のアイテムばかりだが最後にショートソードがあった。

R i Oは同じ名称の武器でも性能が大きく異なる。

理由は武器タイプというステータスで名称や攻撃タイプが決まり短剣や鈍器など10タイプ計50種類ある。ショートソードと同じ短剣は他に「ファルシオン」や「レイピア」など5種類ほどある。例外はレアやユニークアイテム、高スキルプレイヤーが作成したアイテムで武器固有の名称を持っている。

武器の攻撃力などは素材や属性、特徴などのステータスで決まり、内容によってはレアアイテム以上の性能を持ったショートソードもある。

取得したショートソードのステータスを確認すると、先ほど使用していたショートソードの4倍程度の性能があった。

先ほどまで使用していたショートソードの素材が鉄で基本攻撃力が20なのに対して、今回入手したのは素材がステンレスで基本攻撃力が80あり耐久度も向上している。

さらに属性に土、特徴に高耐久度が付きさらに耐久度が向上している。

メイン武器を入手した俺は先ほど投げたナイフを回収して、取得した武器を腰に下げながら町に向かい走り始めた。

戦闘突入（後書き）

難しいです、戦闘シーンは……。
色々試して見やすい書き方を勉強できればと思います。

次回は妹と合流か！？

妹と合流（前書き）

すいませんでした。

先週は体調を崩して寝ておりました。

今回は妹との合流です。

思ったより話が進みませんね。

では、楽しんで頂けると嬉しいです。

妹と合流

私とリツカはマイラット城下町南側一番通りにあるケーキ屋さんに来ている。

半年前のアップデートでアイテム以外の味覚が実装されたため毎週のように新しいお店がオープンしている。

今いるケーキ屋さんもその内の一つで、店内で食べれるためこの辺で上位の人気を誇っている。

ゲーム内ではいくら食べても太らないこともあり、カフェやスイーツ店、レストランは女性客が多く、お酒が飲めるようなお店は男性客の方が多くなる。

私は本日2品目のイチゴチーズケーキを食べながら、ふっと思いついたことを聞いてみる。

「そういえば、お兄さんに場所を移動したこと教えなくていいの？」

私の何気ない質問にリツカは口にホークを入れたまま目を大きく開き1秒ほど固まったあと、「はっ！」とした顔で急いで右の手首のブレスレットに触れたあと空中に手を滑らしていく。

今リツカが触れて操作しているブレスレットは、通常は意識上で操作するステータスチェックやフレンド登録者との会話などを、簡単に操作できるようにした補助端末で経験値の取得履歴など付加機能も付いている。

ちなみにこの補助端末は指輪など色々な形にデザインにすることが

でき、そのうえ装備品ではないため戦闘などで破損することがない。そのため半数以上がファクションの一部としても使用している。

「あつエイト、どこまで来たの？」

なら、もうすぐね。

今は南のカフェにいるよ。

えっ、なまえ？

う、うるさいな！

とにかく南一番通りの先週できたカフェにいるから来て！！

……いいから、早く来い！！」

リツカちゃん声出てるし。

それに、その説明じゃ場所分らないよ。

普通は……

お兄さん無事にこれるかな？

意識上にフレンド間通信の着信音がなり、発信者を確認すると妹のリツカからだったので着信に出る。

>あつエイト、どこまで来たの？<

>もう、マイラット城下町が見えてるよ。<

>なら、もうすぐね。<

>後5分もあれば付くと思うけど、今どこにいるんだ？<

>今は南のカフェにいるよ。<

>南のカフェって、名前は？<

>えっ、なまえ？<

>名前も知らない所に入ったのか？　そもそも何で北でなく南なんだよ？<

>う、うるさいな！　とにかく南一番通りの先週できたカフェにいるから来て！！<

>おい！　名前ぐらいお店の人に聞けばわかるだろ？<

>……いいから、早く来い！！<

逆切れのうえ通信を切られた。

そもそも、俺が北から来るの知ってるくせになぜ南側にいるのか。俺は500mほど先に見えるマイラット城下町を見ながらため息をついた。

マイラット城下町はマイラット城を中心に半径30Km程度の大きさを持つマイラット皇国の首都である。

城だけで半径2Km程あり、その周り2Kmに政府街、その周り10Kmに貴族街、残りが市民街と言う配置で構成されている。

貴族街は貴族指定のNPCやユニオン所有の建物がある地区で、政府街にはRIO運営委員会の建物などがある。

各層の境には壁があり権限がないと入れない仕組みになっているが、政府・貴族層にある各施設へは転送魔方陣で移動することができる。

貴族街からマイラット城下町の城門の間には10本の大きい道が円周上あり、貴族街に近いところから1番、2番と名前が付いている。

今回妹のいる場所は南側の貴族街に一番近い大通りらしい。

この辺は最近カフェやケーキ屋が増えたせいで最近は女性に人気の場所である。

正直男の俺は入りづらい・・・

俺は着いたばかりのマイラット城下町北側城門から市民街へ入った。市民街に入ると中心にある城へ向けて幅15mの真っ直ぐな道が続いている。

その周りには回復アイテムなどの個人露天、宿、武器やなどのショップが連なりこれから町を出る人、帰って来た人で賑わっている。

ここから2Kmも離れるとプレイヤーが購入できる住宅街があり、俺のメインホームもあるが今は南側の一番街に行くため転送屋に向けて足を運ぶ。

実は俺自身も転送スキルはあるが、女性に人気のある場所などは当たり前前の如く登録はしていないため今は役にたたない。

そもそも最初からマイラット城下町と言われれば転送一回で済んだのに、妹がちょこまかと移動するせいで後を追うように移動する羽目になった。

転送屋は暇なプレイヤーがこの広い町の移動を便利にするためにしていて、100ギル程度で任意の場所に転送してくれる。

俺は南側一番通りに転送してくれる人をお願いして、目の前に出現した魔法陣に足を踏み入れた。

それから10分後、南側1番通りに転送した俺はMAPに表示させ

たりツカの反応を頼りに何とか見つけることができた。

予測通り女性客しかいない店内で知らない女の子とケーキを食べている。

「やっと見つけた。せめて店の名前を教えろよな。それにここはカフェではないぞ。」

「んっ！やっと来たよ。遅いからミウとケーキを食べていたんだよ。貴重な時間を待ったんだからここの料金も払って欲しいところだよ。」

苦情にたいしていちやもんを返す妹をしらけた目で見た後、ミウと呼ばれた子に目を向ける。

髪の毛はシルバーのストレートで肩位まであり、顔は小さめで目は薄いピンク色をしている。

身長は座っているため分からないが、ゲーム内では高めにする傾向がある中で少し小さく見える。

胸は大きくもなく小さくもなくつてところだ。

服装は肩には淡い色のケープを下に七分丈の服で全体に魔術系の装備をしている。

「ミウ？知らない子だけど友達か？」

「そうだよ。こないだ絡まれてる所助けたでしょ。その時の女の子だよ。どうせ覚えてなさそうだけどね。」

俺はミウと呼ばれた子をじっと見ながら記憶を手繰り寄せる。

確かに誰かを助けたのは覚えているが、その後俺だけ急いで移動したから正直顔までは覚えていない。

「えっと、ごめん。思い出せない。」

顔を覚えてなかったのはまずかったと思った俺は、頭を下げた。
ミウは顔を赤くし「いいんです。平気です。はい。」と手と顔を横に振りまくっている。

その後、お互いの自己紹介を済ませたあと、やっと当初の目的について話を出すことができた。

「それよりリツカ、アイテムを返してくれ。」

それを聞いた妹は目を細めとても良い微笑みを浮かべる。

こんな時は大抵善からぬことを考えている。

俺は急ぎアイテムを返して貰うため話を畳掛けようとしたところ…

…。

「アイテム返してあげるから、ミウにEMエキスパートモードの戦闘を教えてあげてね。」

先制攻撃を食らう。

しかたない、粘って逃げるしかない。

「なぜ俺が？ 武道会に出て順位持ちなんだからリツカが教えれば良いだろ。」

それから暫く、俺の言い分をリツカが無視しミウがひたすら謝っているという訳の分からない状態が続いたが、5回目の「ならアイテム返さないよ。」という一言で俺は白旗を上げた。

「わかったよ。教えるからアイテム返してくれ。」

俺は精神的な疲れのため、席に着きアイステイーを頼んでゆつくりすることにした。

アイステイーを飲んでいる間にお互いの現状を確認した俺は、新たに発生した問題に向き合うことにした。

「えっと、ミウさんだっけ？」

「はい！ あつ、ミウでいいです。」

「了解。俺のことはエイトでいいからね。早速だけどミウのステータスを教えて。概略でいいから。」

「今日Lv30になったばかりで、ん〜と職業は魔法使いなのかな？」

「INTにポイントを振ってるか、魔法スキルを覚えてるってこと？」

「はい！ そうです。」

ライストーン・オンライン

RiOでは基本的に誰でも全てのスキルを取得できるため職業という概念がない。

代わりに職業名というステータス項目があり、自分のプレイスタイルで自由に3つまで作成できる。

多くの人は「剣士」などを付けるが、中には「危険物」や「お祭り」

—— さつき北側の城門付近で見かけた —— など意味不明な名前を付ける人もいる。

ライストーン・オンライン

そのため、RiOでは他のゲームよりステータスやスキルの内容が

重要となる。

ミウの場合は魔法スキルと魔力を高めるステータス配分になってい
ると思われるが、正直Lv30ではまだ個性と言える偏りはないの
で「初心者」を考えて問題ない。

「エキスパートモードEMでの戦闘経験はある？」

「ないです。」

「熟練度は余ってる？」

熟練度はレベルが上がると必ず3ポイント貰えるポイントで、ステ
ータスやスキルへ割振って自分を成長させることができる。

ステータスに割振った場合は1ポイントがそのままステータスの数
値に加算され、スキルの場合は対象のスキル経験値に加算される。
スキル経験値が一定値を超えるとスキルレベルがあがる。

「リツカと会ってから使ってないので36ポイント余ってます。」

「そうか。この後時間あるかい？ あるなら訓練所行こうか。」

「訓練所ですか？」

訓練所とはプレイヤーが戦闘訓練をする為の場所で商工会議所と志
願兵訓練所で借りることができる。

利用者の多くはエキスパートモードEM使用者で、戦闘時の連携や新しいスキルのコッ
スを攫む練習などをしている。

「エキスパートモードそう、EMについてと、こちらからの条件を説明したいのだが、
もし時間ないのなら次回でも平気だよ。」

「えっと、訓練所は初めて聞いたので、時間があります。」

「そうか、なら遠くなるが施設数の多い志願兵訓練所に行こう。」

行くことを告げ、会計をするため店員を呼んだ。

妹と合流（後書き）

次回は休みなく投稿できるよう頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997t/>

ギブソウル（仮）

2011年10月8日20時26分発行